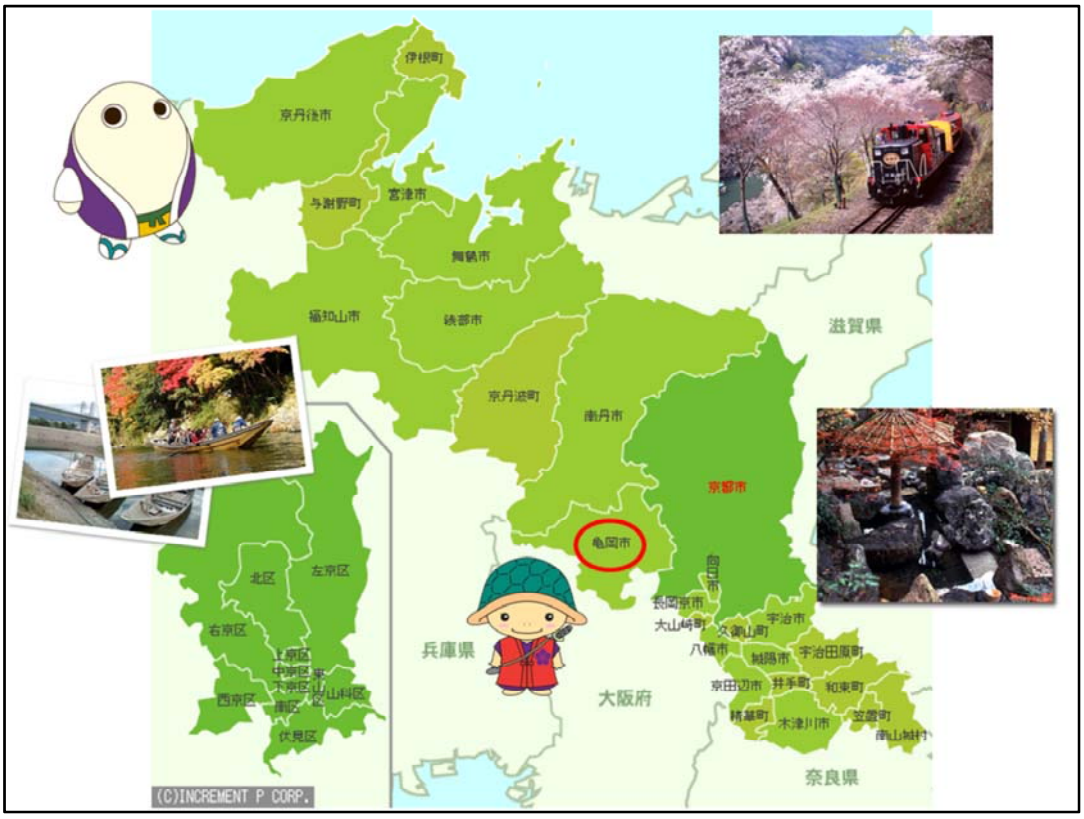
京都府から参りました　千代川こども園の片岡倫子でございます。
今回、保育環境を語ろうという趣旨に基づいて　私たちの園では、空間的視野から環境を考え、「子どもと創る遊びの空間」というテーマで取り組みをしました。その取り組みの内容をご報告させていただきます。



千代川こども園は、京都府亀岡市にあり、現在、192名の子どもたちが在園しています。地域には新興住宅街があり、子育て世帯の転入も増えていますが、周辺には田畑が広がるのどかな環境です。

中庭や園庭には四季折々の木々や草花が育ち、天気の良い日は、子どもたちが、戸外で元気いっぱいかけ回り、楽しい歓声もきこえてきます。

夏には気持ちのよい水遊び。
プールは室内にあるので温水にして一年を通して入っています。

秋には自分たちで植えたサツマイモを掘り、収穫も楽しみます。
そして給食やおやつでいただきます。

冬には雪がたくさん積もると、園舎の前で雪遊びが始まります。

寒くても元気いっぱい、園庭を走り回る子ども達。

保育目標

・丈夫で生命の大切さを知る児童
・友達と仲良くできる児童
・善し悪しを知り、他人に親切な児童
・正しい言葉を使い、挨拶のできる児童
・豊かな心を持ち、
ありがとうの言える児童

このように楽しく過ごしながら、5つの保育目標をもとに子ども達がのびのびと活動できるよう努めています。

保育利用状況

千代川こども園

	5歳	4歳	3歳	2歳	1歳	0歳	合計
標準時間 (7：00～18：00)	28	24	32	17	23	11	135
短時間 (8：00～16：00)	11	11	18	8	9	2	59
教育時間 (1号認定) (9：00～14：30)	0	4	3	0	0	0	7
合計	39	39	53	25	32	13	201

平成30年12月

（こちらは）研究時の本園での保育利用状況です。表にありますように、半数以上の子ども達が標準時間を利用し、長い時間を園で過ごしています。

長い時間を過ごす子ども達が、楽しく安心して過ごせるように心がけています。

現状・課題

- 子どもの育ちを支えるために、様々な体験をしている。
- 室内での自由遊びでは、その時その場では夢中で遊んでいても遊びが次に**継続されていない**。

⇩

物的・空間的な保育環境の工夫によって、改善できるのではないか？

先ほど、本園の保育の様子をいろいろ見ていただきました。子どもの育ちを支えるために、様々な体験をしています。しかしながら、室内での自由遊びいろいろは、その時その場では夢中で遊んでいても遊びが次に継続されていないことが課題でした。
そこで、物的・空間的な保育環境の工夫によって、課題を改善できるのではないか？と考え、「保育所保育指針」や「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」を確認することから始めました。

そもそも「教育」とは？

『保育所保育指針』第２章(保育の内容)より

子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助である。本章では、保育士等が、「ねらい」及び「内容」を具体的に把握するため、主に教育に関わる側面からの視点を示しているが、実際の保育においては、養護と教育が一体となって展開されることに留意する必要がある。

⇒ 活動（遊び）が豊かに展開するためにも
保育環境の工夫が必要なのではないか？

「保育所保育指針」第2章（保育の内容）の中には「子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助」と書かれている部分があります。
このことからも子どもの活動が豊かに展開するためにも保育環境の工夫が必要ではないかと考えました。

『保育所保育指針』　第１章（総則）より

⑶ 保育の方法

イ　子どもの生活のリズムを大切にし、健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境や、自己を十分に発揮できる環境を整えること。

オ　子どもが自発的・意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。

そして「保育の方法」と「保育の環境」という項目の中で書かれている総則についても整理してみました。
保育の方法には5つの項目がありますが、今回の研究ではこちらの2つの項目に着目しました。
一つ目は「情緒の安定した生活が出来る環境」や「自己を十分に発揮できる環境」を整えること。
二つ目は「子どもが自発的・意欲的に関われるような環境」を構成することです。

『保育所保育指針』　第１章（総則）より

⑷ 保育の環境

保育の環境には、保育士等や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、更には自然や社会の事象などがある。

保育所は、こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう、次の事項に留意しつつ、計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない。

そして保育の環境においては「人、物、場などの環境が相互に関連し合い子どもの生活が豊かなものとなるよう、計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない」ことを意識しました。

『保育所保育指針』　第１章（総則）より

⑷ 保育の環境

ア　子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるよう配慮すること。

イ　子どもの活動が豊かに展開されるよう、保育所の設備や環境を整え、保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること。

この保育の環境にも4つの項目があり
一つ目として「子ども自らが環境にかかわり、自発的に活動し、様々な経験をつんでいくことができるよう配慮する」こと。
二つ目として「子どもの活動が豊かに展開されるようにする」こと。

『保育所保育指針』　第１章（総則）より

⑷ 保育の環境

ウ　保育室は、温かな親しみとくつろぎの場となるとともに、生き生きと活動できる場となるように配慮すること。

エ　子どもが人と関わる力を育てていくため、子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。

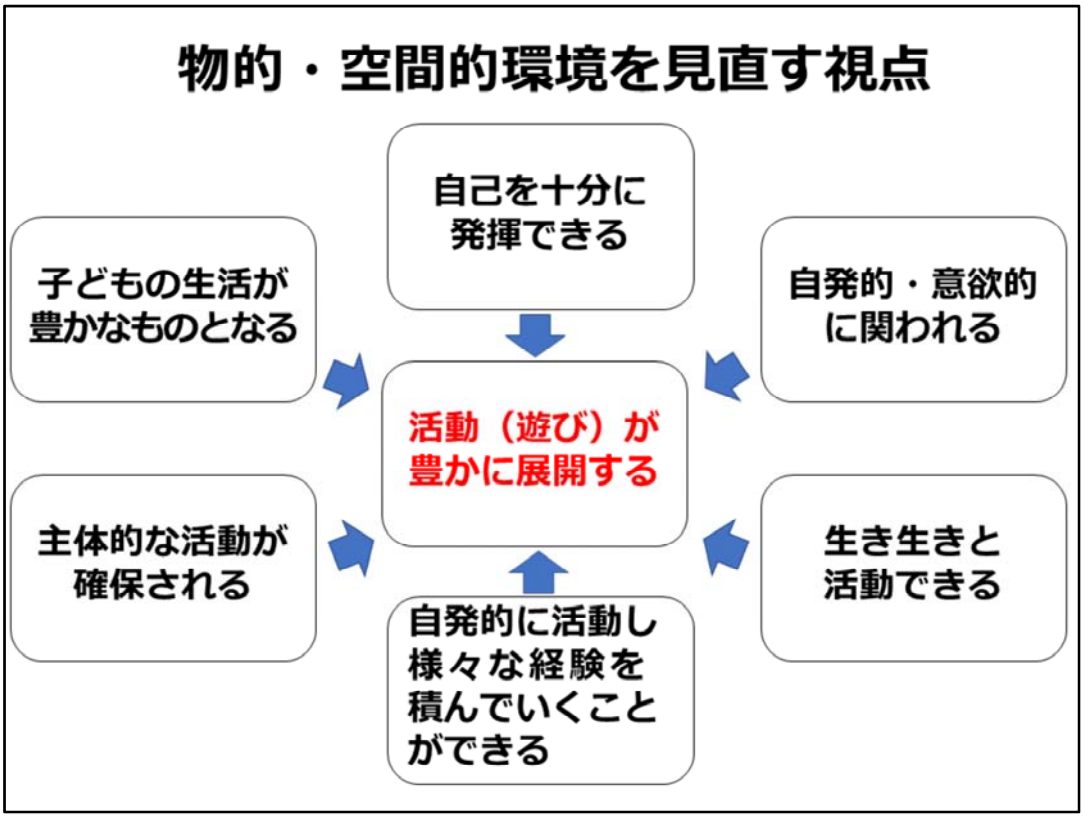
3つ目として、保育室は「温かな親しみとくつろぎの場」、「生き生きと活動できる場」となること。
4つ目は「子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること」と書かれています。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』
第１章（総則）より

- 「保育教諭等は、園児の主体的な活動が確保されるよう、園児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」

- 「保育教諭等は、園児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない」

さらに『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の総則の中にも「主体的な活動が確保されるよう、計画的に環境を構成しなければならない」
「教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない」と書かれています。



以上のことを踏まえ、これらは環境として大事だということを確認し、物的・空間的環境を見直す視点をこのようにまとめてみました。
この（まわりにある）視点を捉えることで（真ん中にある）「活動が豊かに展開する」のではないかと考えました。

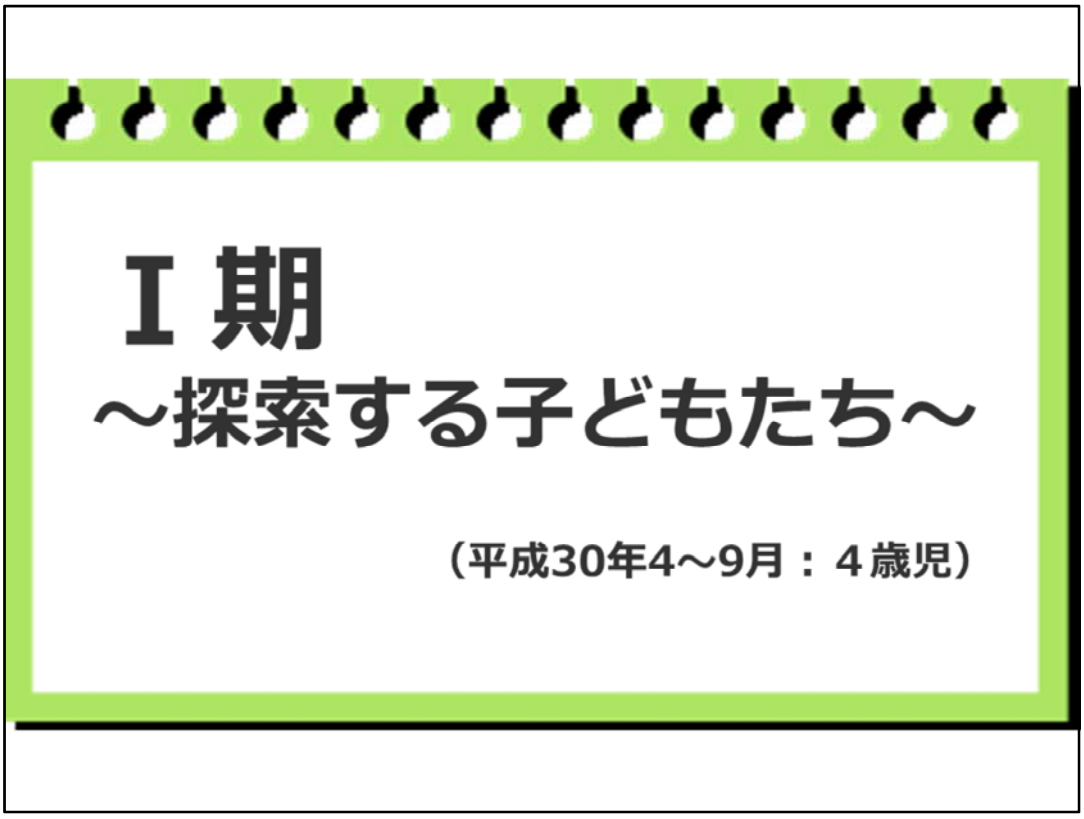
研究の目的

《目的》

とくに、空間的環境を見直すことを通して、「自由あそびの充実化」と「遊びの継続」を目指すことで、子どもの遊びや姿の質的な変化を研究する。

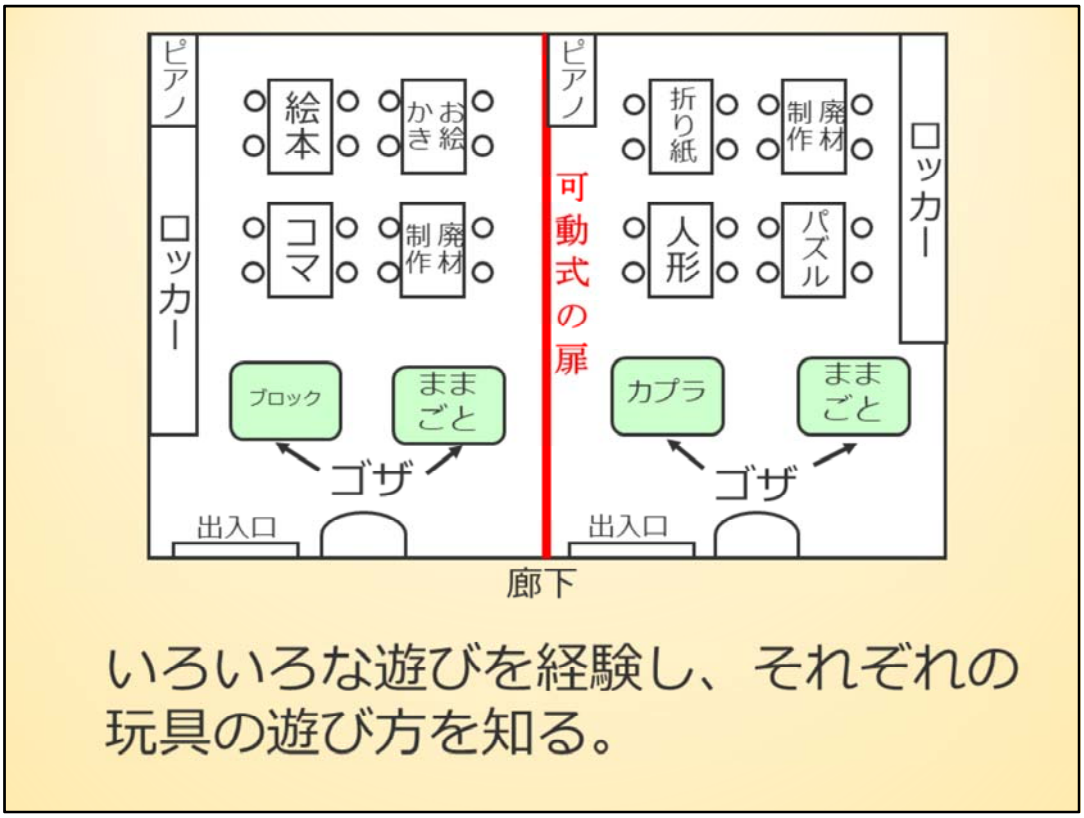
《対象》　4歳児2クラス
（　１９名、２０名　）

今回はとくに空間的環境を見直すことを通して、4歳児2クラス39名を対象に、「自由遊びの充実化」と「遊びの継続」を目指すことで子どもの遊びや姿の質的な変化を研究することにしました。
その実践の事例を見ていただこうと思います。



年中に進級した4月から9月は、それぞれのクラスに分かれて過ごしていました。

各部屋で活動し、自由遊びの時間は、各部屋でそれぞれが遊びのコーナーを設置していろいろな遊びを経験できるようにしていました。真ん中の仕切りは、可動式の扉になっていますので、Ｉ期の９月末までは、扉は閉めた状態で使っていました。この写真は可動式の扉を閉めた状態です。



Ⅰ期ではこのように各々の部屋に机と椅子を並べ、あいたスペースにゴザを敷き、それぞれのゴザの上に一種類ずつ玩具を出して遊べるようにしていました。その限られたスペースの中で、ひとつの玩具と向き合い、遊びながら玩具の使い方や特性を知ったり、遊び方を知るようになったりしていきました。

Ⅰ期　子どもの姿

- ▶いろいろな遊びに興味をもつ
- ▶選ぶ楽しさ、お気に入りの遊びを見つける
- ▶仲の良い友達と遊ぶことで安心感を得る
- ▶**遊びを次から次へと変えて継続性がない**

このⅠ期では、いろいろな遊びに興味を持ち、選ぶ楽しさを味わいながら、お気に入りの遊びを見つけていきました。仲のよい友達と同じ遊びをすることで安心し、楽しく会話をして、友達関係を築いていく子どもの姿がありました。その一方で一つの遊びを継続できない子どもの姿もありました。

Ⅰ期　振り返り

遊びを次から次へと変えて継続性がない

なぜ？ ⇨ 一つの空間を時間で区切って使い
時間になると片付ける

「隣のお部屋で遊んでいいですか？」
「○○くんと遊んできていい？」

なぜ？ ⇨ 自分のクラスという概念

なぜ遊びを次々と変えて継続性がないのかと考えたときに一つの空間を時間で区切って使い、遊んでいても時間になると片付けることがあたりまえになっていることに気がつきました。またそれと同じくして時折、「隣のお部屋で遊んでいいですか？」「〇〇くんと遊んできていい？」と言う声が子ども達から聞こえてきました。子どもたちは自分のクラスという意識が強く、部屋で遊ばなければならないという概念があるようでした。

課題

自由遊びの充実化と遊びの継続

改善点・工夫

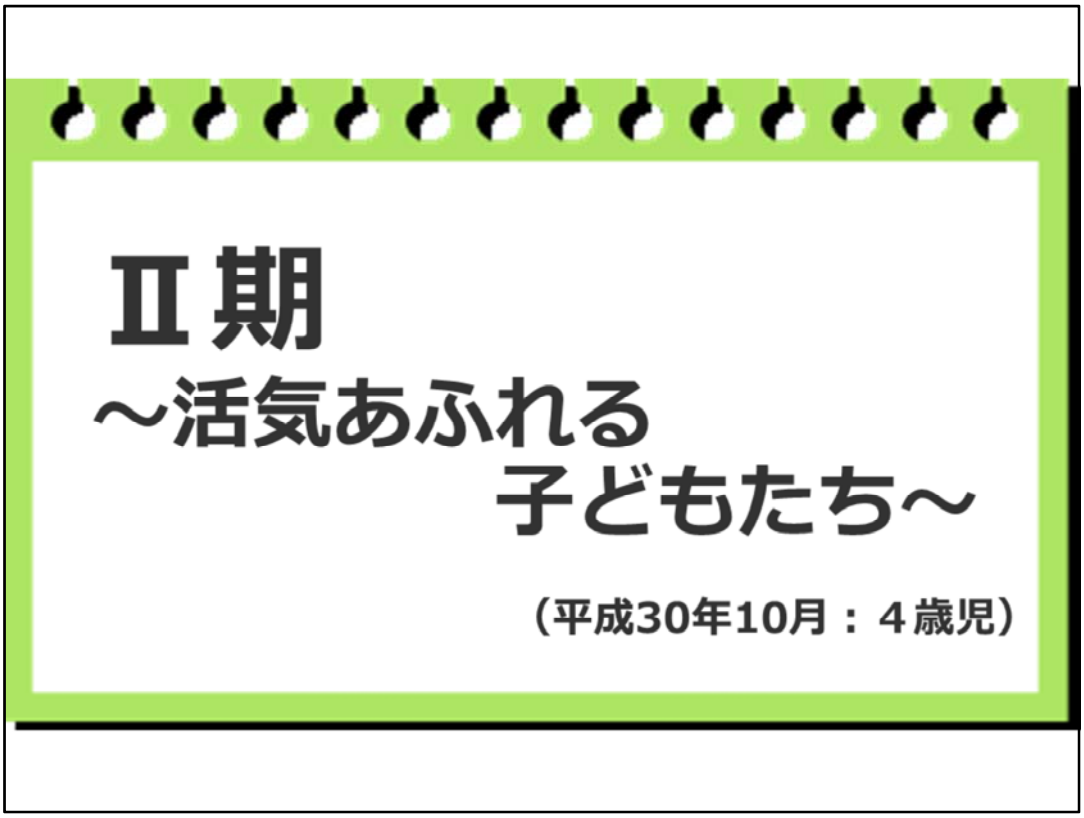
・生活と遊びの空間づくり

・広く遊べる場づくり

・遊びにおいてのクラスの概念をなくす

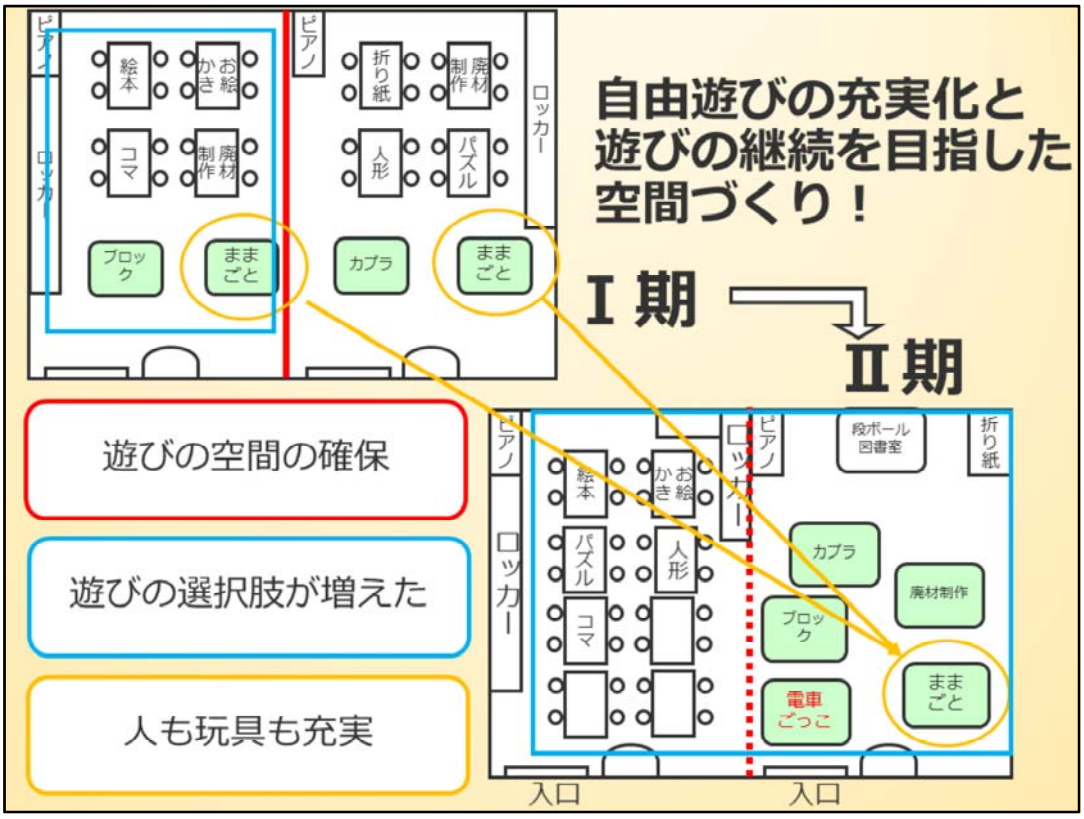
・子どもの興味に沿った遊びの場づくり

この２点の子どもの姿から、自由遊びの充実化と遊びの継続を課題として捉え、それを目的とした、「子どもと創る遊びの空間」が始まりました。具体的には、生活と遊びの空間づくり、広く遊べる場づくり、隣のクラスという概念をなくす工夫をしました。子どもと一緒に環境を考えたいという保育者の思いから子どもの意見を取り入れた遊びの場づくりにも取り組みました。

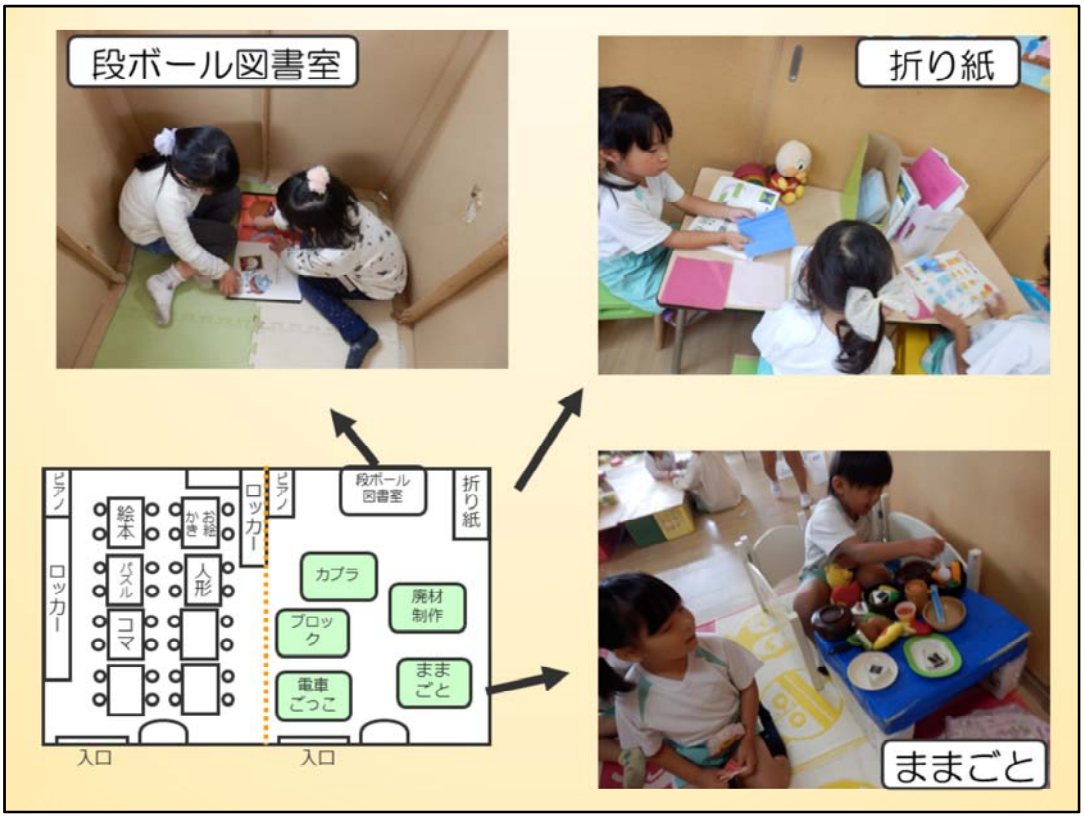


（スライドのみ）

広く遊べる場づくりとして、まず取り組んだことは可動式の仕切りを開け放つことでした。各部屋にあった机といすを片方の部屋にあつめて生活の場とし、広くなったもう片方の部屋を遊びの場としました。遊びの場では入り口側には動きのある遊び、部屋の奥には静かな遊びを中心に、子どもの意見を取り入れた遊びのコーナーづくりをしました。



それぞれの部屋で用意していた同じ遊びをひとつにまとめたり、あいたスペースに他の玩具を用意したりして、遊びの選択肢を増やしました。遊びを統合すると一緒に遊ぶ仲間が増え、会話も増えて遊びが盛り上がるようになりました。このようにして、以前に感じていた隣のクラスに行くことや友達と遊ぶことへのためらいはなくなり、同じ興味同じ目的を持った気の合う友達と遊ぶ姿があちこちで見られるようになっていきました。友達と遊びを共有できるように、ゴザを敷いてスペースを作ることもしました。ゴザを広げたスペースに、牛乳パックで作ったシンクやテーブル、いすを並べると、友だちを誘い合ってままごと遊びを始める姿が見られるようになりました。



エプロンをつけてお料理を作るのが嬉しい子ども達。「今日はハンバーグですよ」「お野菜も食べてね」「デザートはアイスです」とおうちでの様子も再現され、見ているこちらも楽しくなりました。仲間が集まることで遊びにも活気が出てきました。
出入りの多い入口側に動きのある遊びを集め、遊んでいる様子がひと目で分かるようになったことで、遊びの選択もしやすくなりました。
部屋の中には子ども達がダンボールで囲いのある図書室を手作りし、落ち着ける場所も確保しました。そうすることで、１人になって静かに過ごしたり、ひとりで集中できる時間をつくったりすることも出来ました。
静かな遊びと動きのある遊びのスペースを別々に配置したので、壁側の折り紙を折るスペースでは、じっくりと取り組む姿も見られました。以前は「先生つくって」「先生が折って」と言っていた子どもも、自分で折ろうと本を広げたり、見ながら折ったりするなど、自分で考え、人に頼らずにできるようになっていきました。 このような経験を繰り返すうちに、折り紙の端と端を合わせるのが上手になったり、丁寧に折ったりすることも身についていきました。

子ども達は一つの遊びにじっくりと取り組むようになり、試行錯誤して、繰り返し挑戦する姿も見られるようになりました。
小さな木片を積む遊びでは、ゴザの上でも各々が集中して、積み方を考えています。

こうした遊びを繰り返しながら、遊びに夢中になっていくことで遊びを継続させたい気持ちも強くなり、「つづきします」カードや「こわさないでね」カードが登場することになりました。はじめはカードを保育者が作っていたのですが、「僕も」「私も」となるうちに、子ども達は保育者の文字を真似て書いたり、自分で名前を書いたカードを作ったりするようになりました。そして、このカードを作ったことで、さらに遊びを継続させたい気持ちが子ども達の中に大きく膨らんでいくことにもなりました。このような「遊びの継続」というのは皆さんの園でもされているのでしょうか？

Ⅱ期の環境構成をする時に子ども達が取り入れたい遊びとして、電車ごっこがありました。廃材で線路や踏み切り、運転手の帽子まで作り、それぞれの役になりきって、電車の世界を作り上げていきました。遊びが盛り上がるにつれて、線路もどんどん伸びていき、線路の長く続くイメージから、廊下にも飛び出て遊びだしていました。子どもたちの遊びが発展し、縦横無尽に線路がのびていく様子は、見ているほうも楽しく、たくましさを感じました。

ある日、長い廊下の端から端まで伸ばした線路を、電車に乗った子どもが急に走り出すことがありました。
「あぶないよ」と声をかけようと思ったら、「特急です」という声がしました。
進んでは停まり、進んでは停まり、その度に「出発進行」の声。
これは「各駅停車」だそうです。子どもが夢中になって楽しんで遊びをどんどん自分たちで進めていました。

Ⅱ期　子どもの姿

- ▶一つの遊びにじっくり取り組む
- ▶試行錯誤して、繰り返し挑戦する
- ▶玩具の特徴や遊び方の理解を深める
- ▶遊びを継続させたい気持ちが高まる
- ▶**生活空間での落ち着きがなくなる**

このⅡ期では、一つの遊びにじっくり取り組んだり、試行錯誤して繰り返し挑戦する姿を見ることができました。
遊びに夢中になっていくことで、玩具の特徴や遊び方を理解し、遊びが充実していく様子が見られたことから、Ⅰ期での課題であった、自由遊びの充実化と遊びの継続は達成されました。
しかし、その一方で生活空間においては落ち着く時間や気持ちの切り替えがしにくくなっていました。

Ⅱ期　振り返り

自由遊びの充実化と遊びの継続

生活空間での落ち着きがなくなる

なぜ？ ⇨ 生活と遊びにおいて
常に大人数で過ごしている

その理由として、生活と遊びにおいて常に大人数で過ごしていることが、生活空間での落ち着きのなさに繋がってしまっているのではないかと考えました。

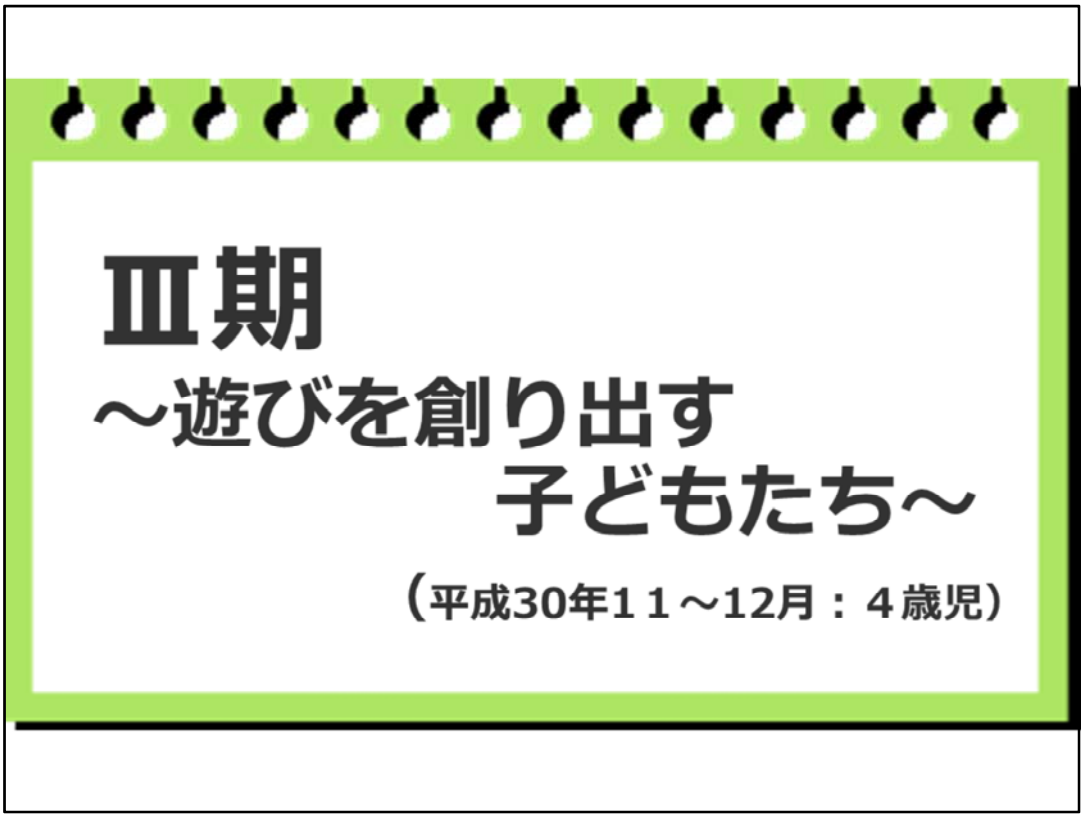
課　題

遊びの充実と生活のメリハリの両立

改善点・工夫

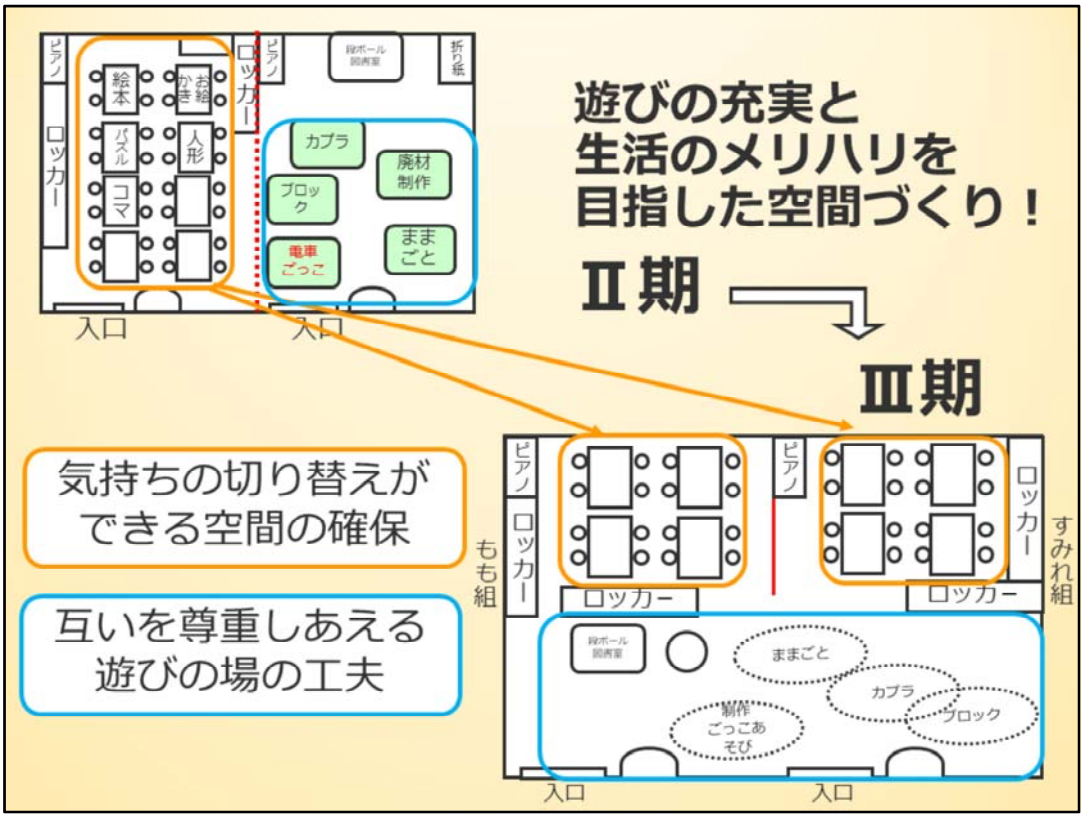
- 遊びの雰囲気を残しながらも
  各クラスの生活空間をつくる
- ロッカーを保育室の区切りにつかう

このような子どもの姿から、遊びの充実と生活のメリハリの両立を課題と捉え、さらに環境を変えることにしました。
具体的には今の遊びの空間や雰囲気を残しながらも、各クラスの生活空間を作ること、生活と遊びの空間をロッカーで区切るという工夫をしました。



（スライドのみ）

Ⅲ期では、遊びの空間と生活の空間をロッカーで仕切り、挨拶や食事をクラスごとで行えるようにしました。
自由遊びの時間は一緒に過ごせるような空間づくりをしました。



遊びの空間では、ゴザは使いたいときに出せるように畳んで置いておき、したい遊びが好きなところで出来るようにしました。

遊びの場に仕切りはありませんが、手作り図書室を置いた方のスペースに読書コーナーができるとそちら側には折り紙を折る子どもやパズルをする子どもなど、静かに取り組める遊びをする子ども達が自然と集まりました。
そしてブロックなど動きのある遊びは落ち着いた空間を邪魔しないように空いているスペースを使って遊んでいました。子ども達は自然な形でひとつにした空間をうまく分割していました。

これは子ども達が、遊びの空間を共有しながら、それぞれが遊びに熱中している様子です。

また、遊びが繋がり融合していく姿も見られるようになりました。
ブロックを積んだカウンターやテーブルの上に、廃材で作ったジュースや焼きそば、アイスクリームを並べて、お店屋さんごっこを楽しんでいます。するとそこに、ままごとをしていた友達がお客さんになり買い物にやって来ました。

楽しくやり取りをし、買い物を終えて帰っていくと、そこには家族が待っていて楽しい団欒が続いていきました。
「一緒に遊ぼう」と約束をしていなくてもお互いの遊びに興味を持ち、尊重することで二つの遊びを融合させつつ成立させていました。

Ⅲ期　子どもの姿

▶自分で考えて遊ぶ

▶興味を示すことのなかった遊びや友達のしていることに関心を持つ

⇩

遊びが発展

さらにⅢ期ではひらめき力や創意工夫も見られました。空間的環境が変化し、遊びが充実したことで周りへの興味、関心が大きくなり、素材ひとつを見るだけで、「これつくりたい」「〇〇みたいや」とひらめいたり発想したり、友達のアイデアを自分の遊びに取り入れて互いの遊びが発展する、という相乗効果も出てきました。

Ⅲ期　振り返り

▶生活の場面ではクラスを分けつつ
合同で遊べる空間を残す

↳ 遊びの時間を集中して過ごせる

▶Ⅱ期までの経験と互いの遊びの尊重

↳ 遊びの空間を創り出す

Ⅲ期では、生活の場面でクラスを分けましたが、合同で遊べる空間を残したことで、時間や気持ちの切り替えができ、遊びの時間を集中して過ごせるようになりました。
Ⅱ期までの経験と互いの遊びを尊重できる気持ちが育まれたことによって、遊びの空間を自分たちで創り出せるようにもなりました。

ここで具体的な遊びの変化の例としてカプラでの遊びを紹介します。カプラに着目した理由は、子ども達が大好きな遊びのひとつであり、常に遊びの場に選んで出していた玩具だったということからです。この遊びは、はじめは横に並べるだけであったり、ただ高く積むのを楽しんでいたりなど、個々で遊ぶ姿が多かったのですが、

Ⅱ期になると、友達と相談しながら協力して楽しむ姿が見られるようになってきました。
見本の写真を見ながら積み方を工夫したり自分の考えたことを友達に伝えたりもしています。

写真を上から見たり、置いてじっと見たり、自分なりに試行錯誤しながら積んでいました。写真と少し違っていても、すぐに倒れてしまっても、「とりあえずやってみよう」とする子どもの姿を見て、そういう気持ちも大切にし、見守りたいと感じました。

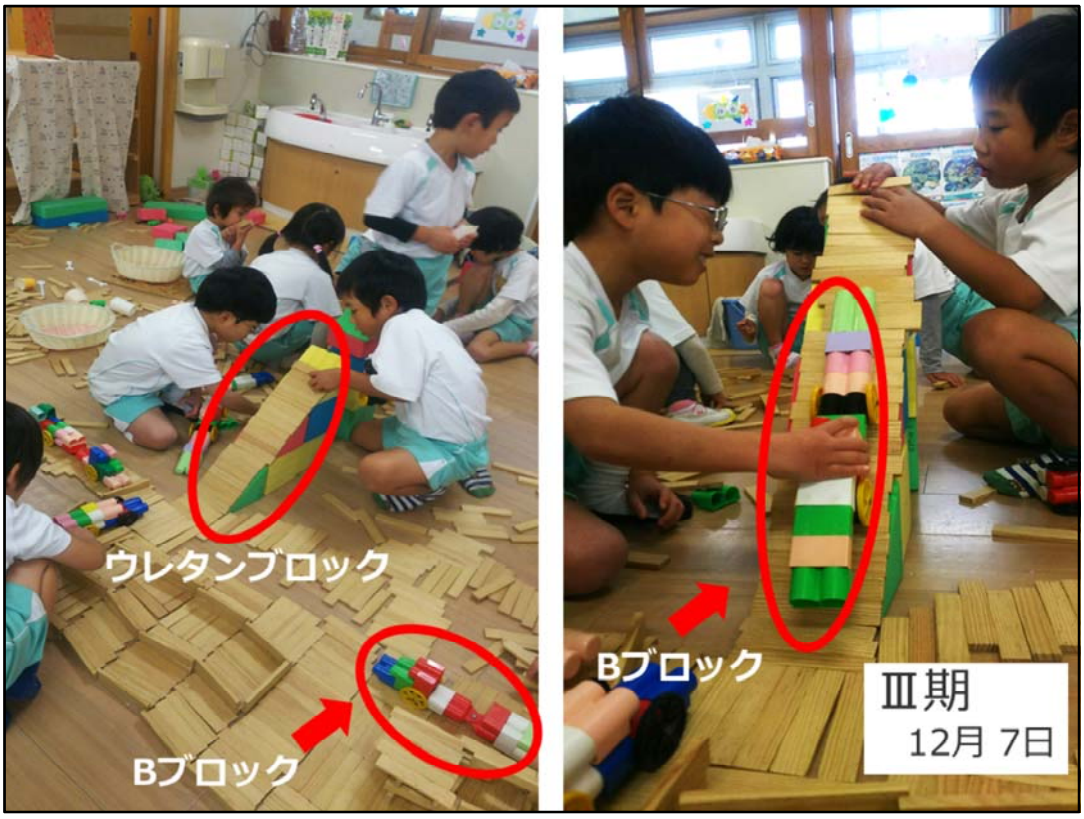
Ⅱ期
11月 2日

坂道を工夫して作れるようになりました。重ねて積んで、横からも見ながら車を走らせて確認しています。道も建物も坂道も出来ていきました。

組み合わせて遊ぶことが楽しくなってくると、みんなの遊びが繋がって町が出来、楽しいお話も広がっていきました。お互いの作ったものをつなげようと考えています。
しきりを無くしたことで、遊びの場が広がり、「合体しよう」が合言葉のようになって楽しく遊んでいました。

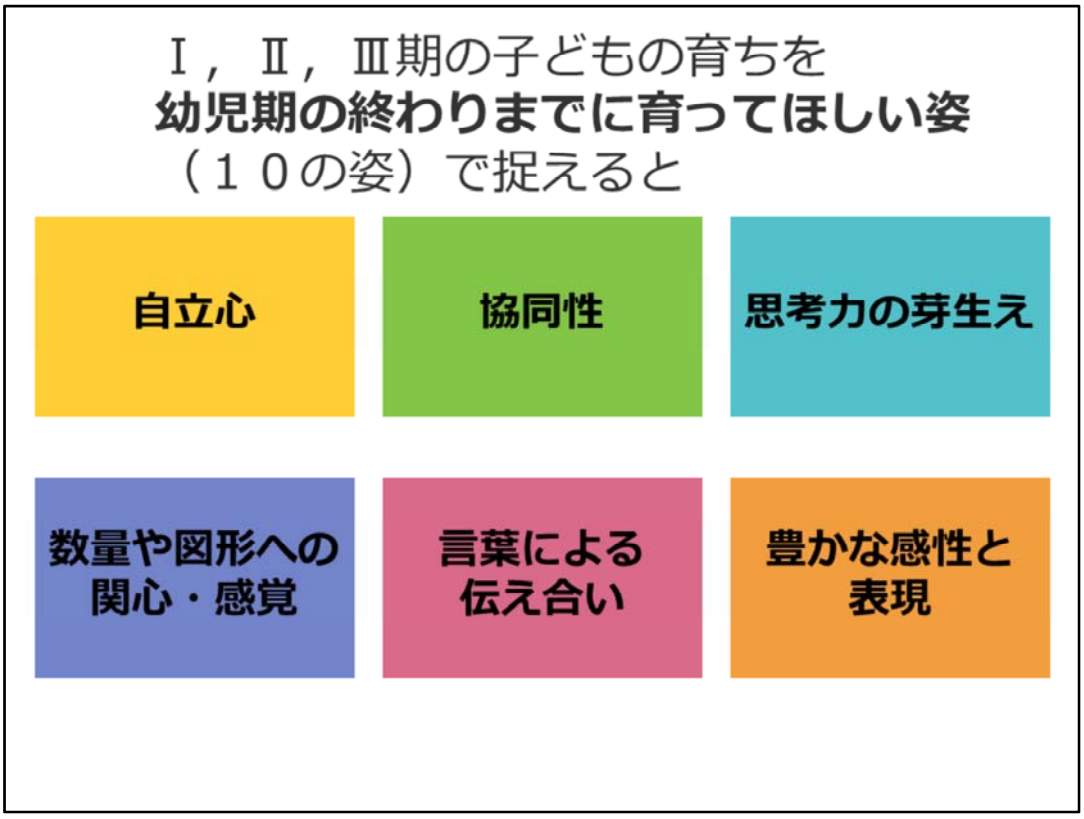
ここからⅢ期になりました。
保育室を線路や道が縦断していきます。でも、もう誰も「じゃま」とは言わなくなりました。作るほうも周りを見て、他の遊びをしている子どもも、壊さないように気をつけています。

遊びがおわると片付けるものと残すものを自分たちで考えて、みんなで整理整頓が出来るようになりました。いつからか「これは残しておいてあげようね」「これはもういらない？」などの会話も聞こえてくるようになりました。思いやりの気持ちやさりげない優しさが感じられます。



さらに遊びが広がってくると、カプラの数が少なくても坂になる方法を考え、皆で協力するようになっていました。みんなの思いが合致すると、ブロックで遊んでいる子ども達とも遊びを融合していきます。三角のウレタンブロックを積み上げて斜面を作り、その斜面にカプラをのせていきました。出来上がった坂道でいろいろなものを転がしてみて、喜ぶ子ども達。友達と一緒だと楽しいようです。このように、生活の場と遊びの場を分けることで、互いを尊重しあえるようになってきたと感じました。

保育室の遊びのルールは子ども達の中でうまく作られるようになり、仕切らなくても、ゴザがなくても、空間を上手に利用しながら、それぞれの遊びが展開していく様子が見られるようになりました。



ここで、カプラでの遊びを通した子どもの育ちを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）で捉えてみました。
特に育ったと感じられるのは、

自立心です。集中力がなく、なかなか伸びてこなかったのが、持続して遊びこめるようになってくる中で、粘り強く取り組めるようになりました。

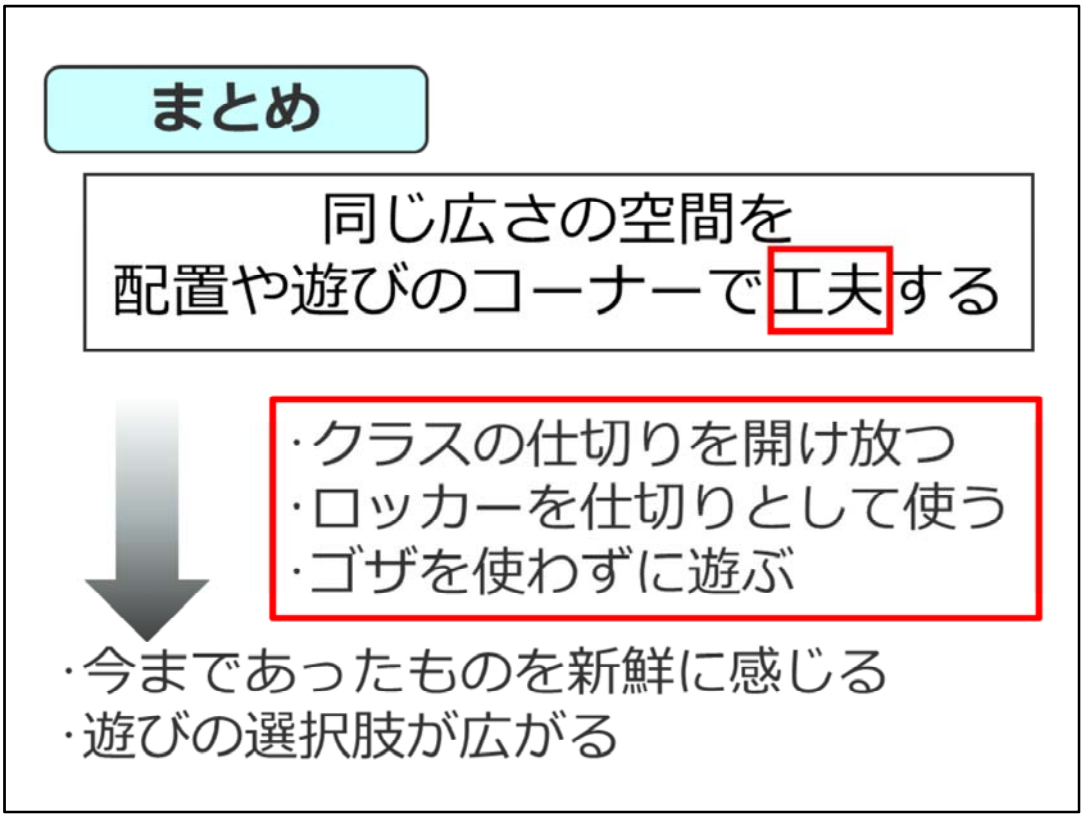
協同性では、個々でしていた遊びを友だちと関わることで、お互いの考えを共有し、ひとつのものを作り上げようと協力する姿が随所に見られるようになりました。

思考力の芽生えでは、カプラの特性を知ったり、友達との関わりの中で、高く積むためにどうしたらいいかを考えたり、自分と異なる考え方があることにも気づいていきました。自分の考えや遊びをよりよいものにするために新しい考えを生み出しながら楽しめるようになっています。

数量や図形への関心・感覚では、遊びを継続することで数や形に触れる体験が増え、数をかぞえながら楽しむ姿もありました。遊びを楽しみながらも自分の思いを達成にするために必要な玩具の数や形を知る感覚が持てるようにもなってきました。

言葉による伝え合いでは、自分の思いや考えたことを友だちに伝えるだけではなく、友だちの考えたことを真剣に聞くことが出来るようになってきました。相談をしたり、話し合いをしたりすることも増え、その中で皆で決めるということもできるようになりました。

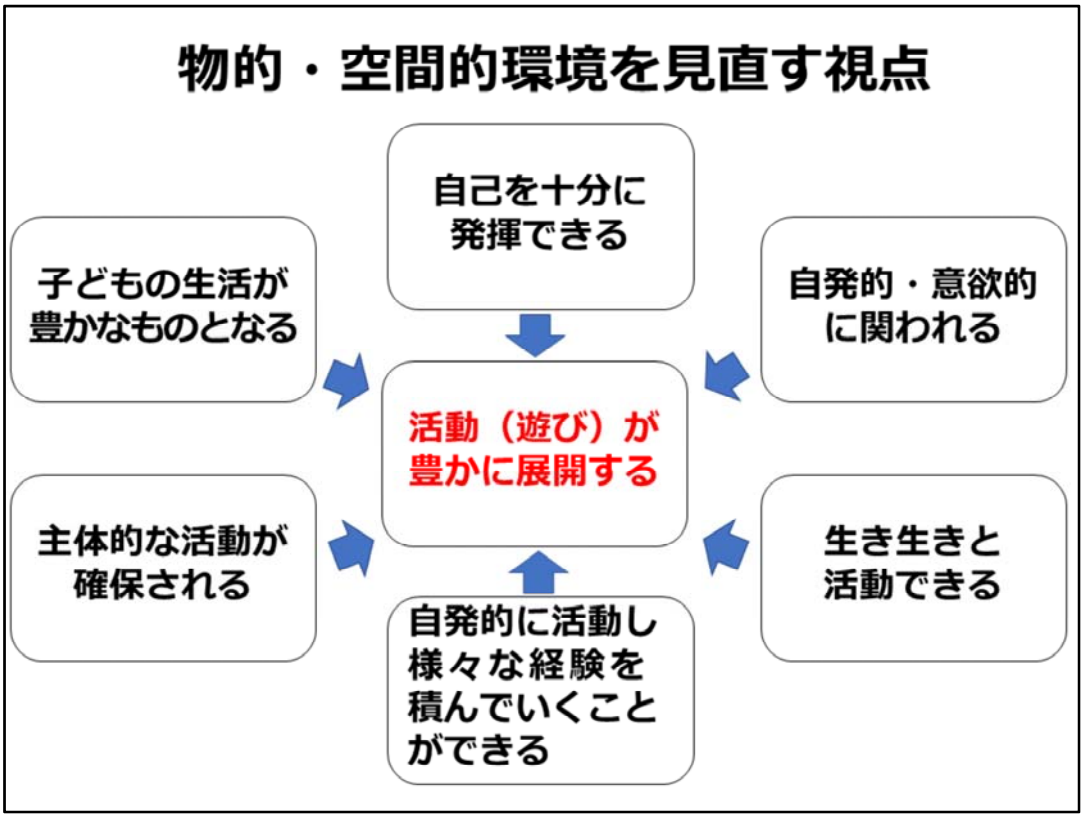
豊かな感性と表現では、友達同士で横にのばしていったり、高く積み上げていったりしながら街づくりを表現する過程を楽しんでいました。また一生懸命積み上げたカプラが、カラカラと崩れていく様子や音さえも楽しめるようになり、「ああ、残念」という気持ちと「もう一回つくろう」という意欲が芽生えるなど、心の持ちようにも変化があらわれました。



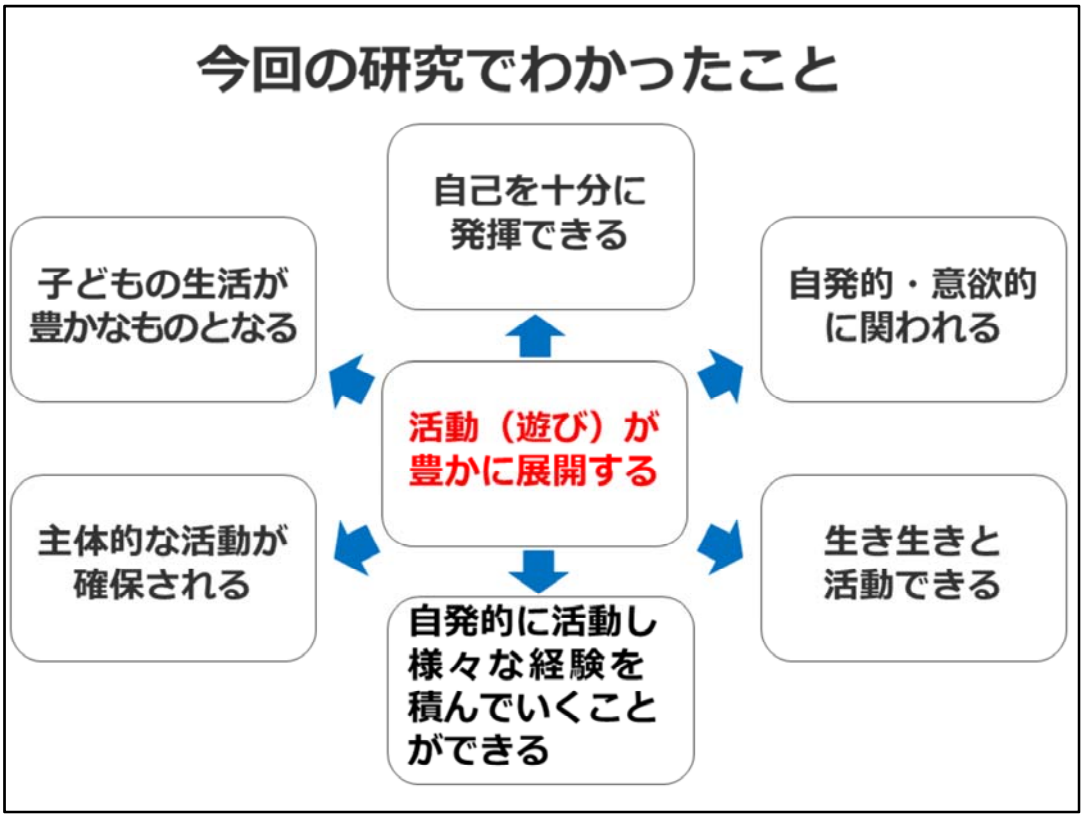
今回の研究を通して気づいたことは、同じ広さの空間であっても、配置の工夫や遊びのコーナーを工夫することで、今までにもあったものが新鮮にみえたり、遊びの選択肢を広げたりできるということでした。

Ⅰ期	探索する	・好きな遊びを見つける ・玩具に向き合う
Ⅱ期	活気づく	・遊びに夢中になる ・子ども同士の関わりが増える
Ⅲ期	創り出す	・遊びを融合・発展させる →遊びを創り出す ・遊びの空間を創り出す

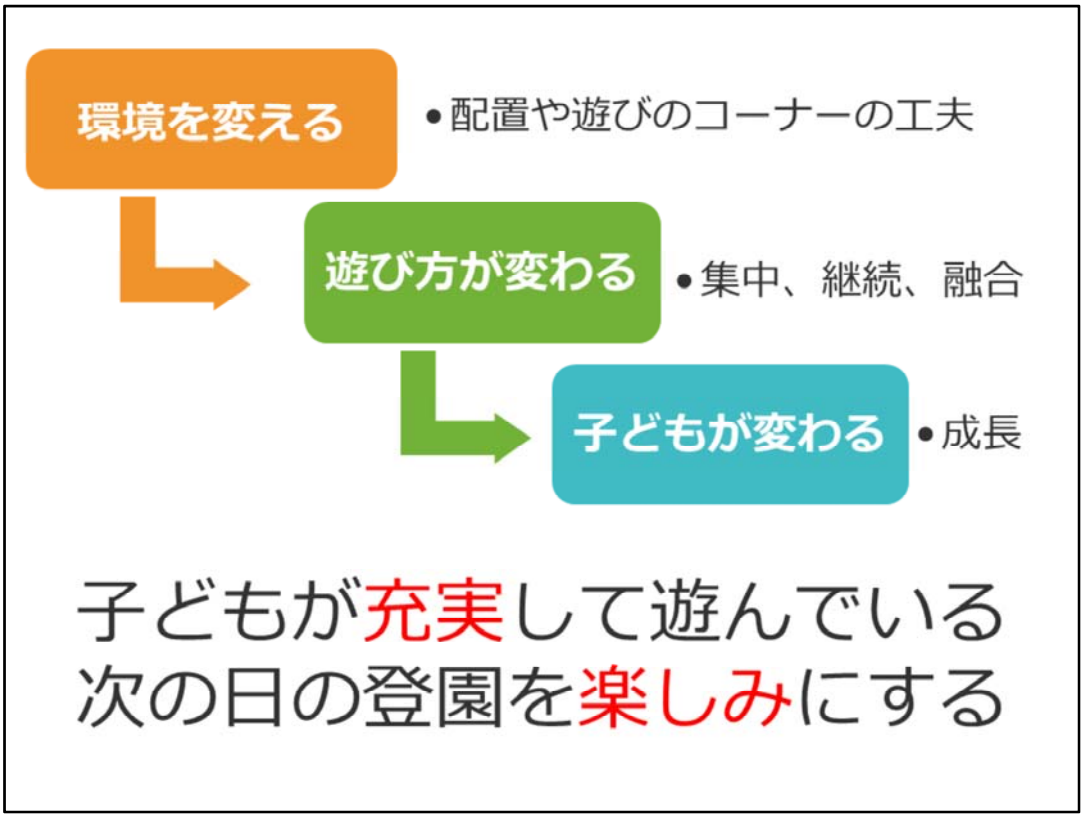
Ⅰ期は子ども達が好きな遊びを見つけ、楽しくあそびながら玩具と向き合う時間ではあったのですが、振り返ってみますと、次から次へと遊びを変えていくのには実は玩具そのものに飽きていたり、遊び方に飽きてしまっていたりすることもあるのではないかとも考えてみました。
Ⅱ期で環境を変えてみると、子ども達は遊びに夢中になり、子供同士の関わりも増えました。子ども達が仲良く楽しく遊び活気があふれるようにもなりました。以前の様に玩具を取り合ったり、「一緒に遊んでくれない」などの仲裁や仲立ちの必要がなくなったことも大きく、遊びの仲立ちは「こんなん作りたいけど、どうしたらいい？」という相談や援助に変わっていきました。
Ⅲ期になると子ども達が遊びを融合させ、発展させていきました。また遊ぶ場所も自分たちで考え、譲り合うことで遊びの空間を創り出すことができました。
保育者の遊びへの参加は働きかけではなくなり、一緒に遊びを楽しむ形になっていきました。



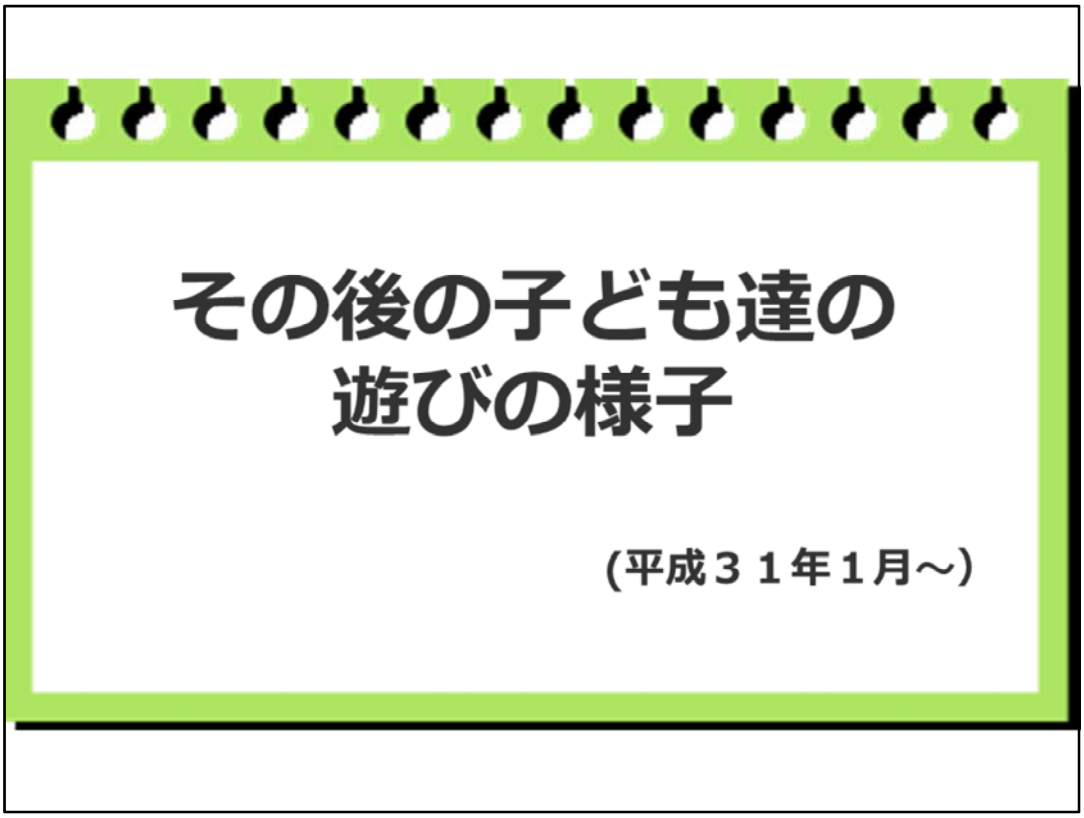
このことから、はじめに活動が豊かに展開するために「視点」として、捉えていたものが、活動が豊かに展開することで、さらに育まれていくのだということにも気がつきました。


今回の研究でわかったこと
自己を十分に発揮できる
子どもの生活が豊かなものとなる
自発的・意欲的に関われる
活動（遊び）が豊かに展開する
主体的な活動が確保される
生き生きと活動できる
自発的に活動し様々な経験を積んでいくことができる

（スライドのみ）



空間的環境を見直し、子ども達の育ちに沿った環境に変えていくことで、日を追って遊び方も変わっていくのを感じました。遊び方が変わると子ども本人だけではなく子ども同士の会話や接し方も変わっていきました。そして子どもたちは充実して遊ぶようになると、「またあとで」「また明日も」と続きが楽しみになりました。
毎日、「明日はなにをしようかな」と期待を持って降園し、次の登園を楽しみにしてくれることは、なにより嬉しいことでした。



子どもたちはその後も遊びを継続させながら楽しんでいます。

これはプールに見立てた囲いに廃材の水色のシートを敷き、自分たちの作った魚を泳がせて遊んでいるところです。たくさん魚が増えたので水族館になりました。

水族館の横には飛び込み台。折り紙で作ったイルカが、次々にジャンプします。
お客さんがたくさん入れるように、と階段式の観客席も出来上がりました。

ここでは床にテープで線路を描き、手作り電車ごっこが始まりました。電車に乗って年中さんを迎えに行き、乗せてあげると、今度は踏み切りのなったおにいさんたちがいて、楽しませてくれました。

園の中でのあたりまえや習慣を違う目で見てみたり、一度思いきって空間的環境を変えてみることは、違った側面や、「やっぱり必要なことだった」と再認識できる機会となるのではないでしょうか。これまで気付かなかった子どもの一面や子どもの姿も見られるかもしれません。今までの遊び方に特に疑問をもたず、自由遊びを続けていたことに、今となっては逆に「何で、今まで変えてみようとしなかったのだろう」と思います。
この実践の発表がそれぞれの園での取り組みのきっかけのひとつになれればと思います。
今回、このような機会をいただいたことにより、あらためて保育について深く考えることができました。子どもを見つめなおすことにも繋がり、子ども達が様々な力と限りない可能性を秘めていることにも、あらためて深く感じることが出来ました。これからも日々の保育を振り返りつつ、毎日を大切に過ごしていきたいと思います。

以上で発表を終わらせていただきます。

ご静聴ありがとうございました